

湖東三山 金剛輪寺の名宝

令和元年
十一月一日 金

十一月十五日 日

滋賀県立琵琶湖文化館寄託品里帰り特別公開

金剛輪寺の歴史と文化

「琵琶湖文化館地域連携企画展」は、

現在休館中の滋賀県立琵琶湖文化館が

収蔵、保管する文化財を、県内各地の博物館施設と連携して積極的に公開していく取り組みです。琵琶湖文化館が

昭和三十六年の開館以来収集してきた貴重な文化財は質、量ともに非常にレベルの高いものとなっています。そして、その収蔵品の中心となっているのが県内寺社からの寄託品です。

「湖東三山金剛輪寺の名宝、琵琶湖文化館寄託品里帰り特別公開」ではその寺社の中から、湖東の名刹として名高い金剛輪寺の寄託品を中心に、愛荘町歴史文化博物館の寄託品も合わせて展観します。また、今回はこれら金剛輪寺の名宝と、もうひとつ湖東の名刹である甲良町西明寺の寺宝も関連作品として展示し、湖東文化の奥深さを紐解きます。

滋賀県と三重県の境として南北にそびえる鈴鹿山脈の一部、秦川山の中腹に金剛輪寺は伽藍を構えます。鈴鹿山脈に沿って南北に並ぶ西明寺、百濟寺とともに「湖東三山」として著名な天台の名刹です。

その草創は伝承では奈良時代に聖武天皇の勅願、行基の開基とされます。その後、慈覚大師円仁（七九四～八六四）が天台の道場として改めたとされ、金剛輪寺では円仁を中心とする祖と仰いでいます。

平安時代後半から鎌倉時代にかけて寺勢は隆盛をきわめ、それを証するようにこの頃の文化財が大量に現存しています。また、鎌倉時代末期には天台密教の一流派である西山流の本拠地となり、天台教学の一大拠点として宗派内でも非常に重要な位置を占めました。

現在総門から本堂に向かう参道の左右は静かな樹林となっていますが、かつてはここに多くの塔頭が立ち並んでいました。しかし、武士の台頭によつてその勢力は次第に奪われ、天正元年（一五七三）、織田信長の焼き討ちによって、本堂・三重塔・二天門は焼失を免れたとはいえ、決定的な打撃を受けてしまいました。その後、江戸時代に入ると徳川将軍家や井伊家など時の有力者の庇護を受けて復興を果たし、往時の姿を回復しました。

現在金剛輪寺には中世建築の代表とされる国宝の本堂、日本最古の大黒天像、鎌倉時代金工品の名作金銅透彫華蔓、平安貴族の信仰を如実に物語る大般若波羅蜜多経をはじめ、塔頭所蔵のものも含めると国宝・重要文化財十五件、滋賀県指定有形文化財六件、愛荘町指定文化財九件が伝えられており、まさに歴史的文化財の宝庫と言えます。多くの信仰の力に支えられた金剛輪寺の文化財は千年以上にわたる祈りの歴史を今に伝えています。

金剛輪寺本堂（国宝）



一珠玉の工芸品

寺院で挙行される修法や儀礼では、金工品や木工品などの工芸品が重要な役割を果たします。護摩壇などに並べられる密教法具、読み上げられる經を入る經箱、叩いて音を発する磬、堂内を莊嚴する華鬘などが代表的です。金剛輪寺には特に工芸の名品が多く伝わり、往時の華麗で壮大な修法の場を想像させてくれます。また、能で用いる仮面や、珍しい太鼓形の酒樽なども伝わっておりバラエティも豊富です。

1 孔雀文磬（重要文化財）

貞応元年（一二二二）



3 金銅透彫華鬘（重要文化財）

鎌倉時代

磬は修法の際に撞木で叩き音を発する梵音具です。元来は石製でしたが現在残っているものはほぼ銅製です。本作は銘文によって制作年代が判明する点が貴重です。雄

華鬘は堂内の柱や梁にかけて場を飾り立てる莊嚴具です。元来は生花をつないで輪にしたものでしたが、後に木製や金属製が主流となりました。金剛輪寺のものは銅板に蓮華唐草を透彫りし鍍金（金メッキ）したもので、ふつくらした蓮華には蹴彫や毛彫で弁脈が描かれており、立体感に富んでいます。非常に完成度が高く、鎌倉時代の華鬘の代表作と言えます。



5 金銅瓶鎮柄香炉（重要文化財）

愛荘町指定文化財

柄の先端に瓶形の鎮（おもし）を乗せるため、瓶鎮柄香炉と呼ばれています。背が低く腰が細く口が大きい火炉や、ゆつたりとした鳥形と雲形があります。現存する柄香炉の中でも古いもので、今後注目されるべき作品です。



8 漆塗太鼓形酒筒（愛荘町指定文化財）

室町時代
愛荘町指定文化財

本品は珍しいケヤキ製の太鼓形の酒樽です。用途としては太鼓ではなく酒樽で、祝いの席などで酒をふるまうのに用いられています。上面に穴が開いていますが、本来この部分には注ぎ口が取り付けられていました。本品は他の同時代の例と比べると胴が長くなっている点が特徴的です。中世に遡る太鼓形酒樽は非常に少なく、本品は貴重な例と言えます。



コラム 漆塗太鼓形酒筒と豆の木太鼓の伝説

漆塗太鼓形酒筒は別名「豆の木太鼓」と呼ばれています。なぜそのように呼ばれているかというと、次のような物語があります。その昔、寺の小僧が庫裏の床下の貯蔵用のそら豆を食べてしましました。秋になって住職が豆を蒔こうとしましたが、もちろん豆は残っていません。これを後悔した小僧たちはせめて少しだけでも食べ残した豆が無いかを暗い床下で探しました。すると、たった一粒だけ豆が残っており、それを畑に蒔き、大きく育つように觀音菩薩に一心に祈りました。やがて芽を出した豆は大きく成長し、大木となつてたくさんの方々が豆を採りました。その後、この豆の木で胴を造つて太鼓としたものが、現在まで伝わる漆塗太鼓形酒筒だと言われています。



二 信仰と教学の世界

金剛輪寺には五部大乗經、じぶんだいじょうきょう 大般若波羅蜜多經、だいはんにゃはらみたきょう 聖教といつた合計二千点を超える大量の典籍、書籍類が伝わっており、信仰の場としての歴史と教学の拠点としての歴史を物語っています。經典類は奈良時代からのものが伝わつており、中でも大般若波羅蜜多經（源敦経発願經）ねほづがんきょう や觀音玄義科などは重要です。經典や天台教学に関する書籍類の他に、仏教関係以外の書物（外典）も伝えられています。医学や薬学、歴史学、詩集など様々な分野の書籍が含まれており、金剛輪寺が仏教のみにとどまらず幅広い学問の場として歴史を紡いできたことがうかがえます。また、この度は金剛輪寺周辺の信仰の一端をご紹介するため、本堂後陣安置の阿弥陀如来立像を寺外初公開します。



国宝の本堂の後陣に安置される阿弥陀如来像です。かつては數十坊の塔頭を抱えたという金剛輪寺の関係寺院の本尊格であつたかと考えられます。中世に流行した三尺の阿弥陀如来像で、体の肉付けも適切で、衣が風を受けて後方になびく様子や複雑な翻りも自然に表現されており、造像仏師の高い技量がうかがえます。十三世紀半ばの作と考えられます。金剛輪寺は天台教学の拠点として栄えましたが、聖教類の中には浄土教関係や浄土宗寺院との関わりをうかがわせる史料もあり、本像とともに幅広い信仰の様相を伝えてい



(滋賀県指定有形文化財)
嘉禎三年(一二三七)
観音玄義科は観音經の注釈書である「観音玄義」の解説書です。本巻は奥書により嘉禎三年に京都の楊梅大宮で書写されたこと、原本は僧了行が宋より初めて将来したこと、金剛輪寺を拠点とした天台山門派西山流に伝来したことなど、非常に多くの情報が得られる貴重な史料です。さらには平成二十年(二〇〇八)の本巻発見まで観音玄義科の存在そのものがほぼ知られていないかつたという点で、世界的にもきわめて重要な遺産と言えます。

A photograph of an open traditional Chinese book, showing two facing pages filled with dense vertical columns of handwritten text in black ink on aged, yellowish paper.

(滋賀県指定有形文化財)

挿絵も交えて用法などが事細かに記されており、禁忌などにも触れられます。本来は草部、木部、金石部、獸部などに分けて総数十一部二十三卷の一大薬学辞典となりますが、金剛輪寺に伝わるものは植物由來の薬物を中心とした総數十卷のダイジェスト版で、後半に獸部や禽部（鳥類）など動物由來の薬物も含まれます。著者の岡本一抱（一六五四～一七一六）は越前生まれの江戸時代の医学者で、非常に多くの医学書を世に残しました。本書もダイジェスト版ながら、膨大な情報が盛り込まれ、一抱の高い薬学の知識をうかが

挿絵も交えて用法などが事細かに記されており、禁忌などにも触れられます。本来は草部、木部、金石部、獸部などに分けて総数十一部二十三巻の一大薬学辞典となりますが、金剛輪寺に伝わるものは植物由来の薬物を中心とした総数十巻のダイジェスト版で、後半に獸部や禽部（鳥類）など動物由来の薬物も含まれます。著者の岡本一抱（一六五四～一七一六）は越前生まれの江戸時代の医学者で、非常に多くの医学書を世に残しました。本書もダイジェスト版ながら、膨大な情報が盛り込まれ、抱の高い薬学の知識をうかがわせます。

A decorative banner at the top of the page. On the left, there is a stylized orange flower with the number '3' in its center. To the right of the flower is a small, detailed illustration of a black and white horse in a running or galloping pose. The background of the banner has a subtle, textured pattern.

10 観音玄義科

(滋賀県指定有形文化財)
嘉禎三年(一二三七)



三聖なる隠者 十六羅漢

十六羅漢は、悟を開き釈迦が入滅した後も長く仏法を伝えるとされる伝説的な十六人の聖者です。僧侶が理想とする修行者の姿、人々が憧れた深山幽谷に住む仙人の姿を反映して、日本では平安時代から信仰されはじめ、鎌倉時代以降は各宗派から広く信仰を集めました。県内でも中世以降に制作された十六羅漢図の作例が数多く伝えられていますが、金剛輪寺にも江戸時代の作が伝わっています。また、湖東三山最北の西明寺にも中世に遡る十六羅漢図が現存しています。今回は湖東の十六羅漢信仰の様相を探るため、はじめて金剛輪寺本と並んで特別出品します。



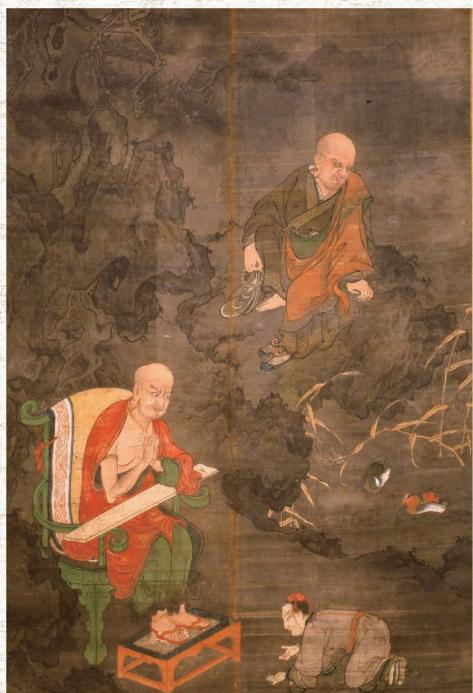
21

22 21
十六羅漢像
(甲良町指定文化財)
金剛輪寺本は一幅に一人の羅漢を描いた十六幅セットの十六羅漢像で、もつとも本格的な組み合わせです。金の使用を抑えつつ、背景も含めてさっぱりとした明るめの彩色を基調としています。描かれる人物たちがまとう衣の華やかな文様も見所です。西明寺本は一幅に二人ずつ羅漢を描いた八幅セットの十六羅漢像です。奥行のある険しく深い岩山の背景に、文様は控えめながら明快な色使いの十六羅漢が対照的で、十六羅漢が手前に浮かび上がってくるような見事な効果を与えています。描かれた時期は異なりますが、近接する天台宗寺院に本格的な作例が残つており、この地の厚い十六羅漢への信仰がうかがえます。



江戸時代
室町時代

金剛輪寺
西明寺



22

- ・本リーフレットは、令和元年(2019)11月1日から12月15日を会期として愛荘町立歴史文化博物館で開催する滋賀県立琵琶湖文化館・愛荘町立歴史文化博物館地域連携企画展「湖東三山金剛輪寺の名宝～滋賀県立琵琶湖文化館寄託品里帰り特別公開～」の展示概要と主な出品作品を掲載したものである。
- ・本リーフレットは滋賀県立琵琶湖文化館学芸員和澄浩介が執筆・編集した。
- ・掲載写真は滋賀県立琵琶湖文化館、愛荘町立歴史文化博物館が所蔵する原版および和澄が撮影したものを使用した。

編集発行：滋賀県立琵琶湖文化館 愛荘町立歴史文化博物館
会 場：愛荘町立歴史文化博物館

